

## 令和7年度学位記・卒業証書ならびに修了証書授与式 学長告辞

陽の光に春の訪れを感じます本日、関係各位のご臨席のもと、令和7年度佛教大学第58回大学院学位記・第74回卒業証書ならびに第48回別科（仏教専修）修了証書授与式を挙行できますことを大変うれしく思います。

卒業生、修了生の皆さん、誠におめでとうございます。

本日、佛教大学での学びを修め、この晴れの日を迎えられた皆さん一人ひとりに、心からお祝いを申し上げます。

また、今日まで皆さんを支え、見守り続けてこられたご家族、ご関係の皆さまに、佛教大学を代表して、深く感謝申し上げます。

皆さんが本学で過ごした年月は、決して順風満帆なものばかりではなかったはずです。思い通りにならない現実戸惑い、先が見えない不安を抱えた日もあったことでしょう。しかし、その一つひとつの時間が、皆さんの内に「考え続ける力」「問いを抱き続ける力」として、確かに積み重ねられてきました。

佛教大学の学びは、知識を蓄えることだけを目的としていません。

私たちが大切にしてきたのは、他者の声に耳を澄まし、自らを省み、社会と誠実に向き合う姿勢です。答えを急がず、容易に結論を出さず、問いとともに生きること。その姿勢こそが、仏教精神に根ざした本学の学びの核心です。

過日、本学の学びを検証する第三者評価委員会が開かれました。その際、ある委員の方から、「仏教精神を建学の理念として掲げながら、その精神が十分に伝わっていないのではないか」というご指摘をいただきました。

たとえば、卒業生が、どのような仏教の教えに学んできたのかを、必ずしも自覚できていないのではないか、というものでした。耳の痛い、しかし大切なご指摘であったと受け止めています。

皆さんは、毎朝の読経の声を耳にし、お釈迦さまや法然上人に関する学びにも触れてこられました。そうした学びを、卒業後も思い出していただく一つの象徴として、私は本日、このような衣と袈裟という装いでこの場に立っています。また、新入生の時に祖山参拝として訪れた知恩院のことを、ここで思い返していただければ幸いです。

とはいえ、仏教精神を身につけることは、決して容易なことではありません。だからこそ卒業にあたり、皆さんに一つの言葉を贈りたいと思います。

仏教には、「和顔愛語（わけんあいご）」という言葉があります。

和やかな表情で人に向き合い、思いやりのある言葉をもって語りかけることを意味します。これは、特別な場面でのみ求められる徳目ではありません。むしろ、日常の中でこそ、その真価が問われる教えです。

たとえば、忙しい職場で意見が対立したとき。

感情的な言葉で相手を押し切るのではなく、まず相手の話に耳を傾け、「そう考えた理

由は何でしょうか」と問い返す。その一言が、対立を対話へと変えることがあります。

あるいは、誰かの失敗や弱さに気づいたとき。

責める言葉ではなく、「大丈夫ですか」「一緒に考えましょう」と声をかけること。その姿勢は、相手だけでなく、場全体の空気をも変えていきます。

和顔愛語とは、相手を変えるための言葉ではありません。

まず自分自身の在り方を整え、他者との関係を育てていくための、生き方の指針です。皆さん一人ひとりが、その実践者として社会に立たれることを、私は心から願っています。

これから皆さんが歩む社会は、正解の用意された世界ではありません。複雑で、変化が速く、時に厳しい現実にも直面することもあるでしょう。そのようなときこそ、本学で培った学びと、和顔愛語の精神を思い出してください。立ち止まり、考え、対話を重ねながら、一歩ずつ前へ進む。その姿勢が、必ず皆さんを支えてくれます。

卒業は終わりではありません。学びは、人生を通して続いていくものです。佛教大学は、これからも皆さんの学びの原点であり、いつでも立ち返ることのできる場所であり続けます。

どうか、自らの歩みを信じてください。

そして、出会う人々とともに、よりよい社会、よりよい未来を、丁寧に築いていってください。

卒業生の皆さんの前途に、限りない可能性と幸多からんことを祈念し、私の告辞といたします。

本日は、誠におめでとうございます。

令和8年3月18日 佛教大学長 佐藤和順